

教育目標 「豊かな心で たくましく 自分の人生を切り拓く 生徒」

重点目標 「豊かな心 確かな学力 健やかな身体」



あ さ ひ こ
朝 日 子

佐渡市立畑野中学校 学校だより

平成29年 10月3日(火) 第11号

著・編 校長 加藤雄一郎 (TEL 66-2058)

粘り強さ本物 堂々の3位 男子新潟地区へ

佐渡市中学校駅伝競走大会 が清々しい秋晴れの下、22日(金)、新穂武道館周辺周回コースで行われました。男子では欠席のためエントリー変更があったり、女子では病み上がりでなかなか練習できず苦しい展開になったりしましたが、全員が最後まで走り切りました。**男子Aチーム**は堂々の**3位**で新潟地区出場を決め、**男子2区**のK(3年)さんが**区間2位**、**5区**のN(3年)さんが**区間3位**で区間賞に輝き、他にも区間4位が2名と選手一人一人が底力を発揮しました。Bチームも9位と大健闘し、女子Aチームは14位でした。女子の本調子でなくとも気力で走る姿にはとても感動しました。本当によく頑張りました。これまで夏の暑い日も汗だくになりながら、駅伝部全員で辛い練習にも耐えてきました。補員レースに出た人も含め、みんなで頑張ってきた成果です。チーム力と粘り強さに感激です。前日の激励会の応援もとてもよく、選手を後押ししてくれたことでしょう。

また、嬉しいことに閉会式前に率先して後片付けを手伝う畑中駅伝部の姿がありました。「畑野の子、めっちゃ働きますねえ。大助かり。」と褒められました。積極的に手伝う姿は畑野中の伝統になりそうです。多くの保護者の皆様も応援に駆けつけてくださり、自分のお子さんだけでなく畑中の出場者みんなに声援を送っていました。選手たちの励みになり、頑張りにつながりました。ありがとうございます。朝の涼しく爽やかな風がいつの間にか熱き風に変わり、そして、閉会式ではまた爽やかな風が吹いていました。

感謝

3年 本間

私は1年生の時から駅伝をやってきました。目標の新潟地区大会に出場することはできなかったけれど、練習の時からみんな一生懸命やり、1年生も初めての駅伝だったのについてきてくれてとても嬉しかったです。中学校最後の駅伝大会前に体調を崩し、部員に迷惑を掛けてしまい、本番では自分が思うような走りができなかったけれど、みんなが最後まで走ることができよかったです。駅伝部に入ってくれた1年生、そして3年間一緒に駅伝をやってくれた3年生に感謝しています。

仲間の応援の力

3年 森下

この駅伝大会はすごく緊張しました。風邪で休んだN君の代わりにAチームのアンカーをやることになったからです。彼より遅いのに大丈夫かなと思ったけどチームの皆がたくさん言葉をかけてくれ、彼の分まで頑張ろうと思いました。走り始めるといろいろな人から応援があって嬉しくなりました。畑中のメンバーが道路脇で「がんばれ!」と応援してくれて元気が出ました。ゴールしても皆が「お疲れ」や「速かった」など声をかけてくれて、本当にいい友達、チームメイトを持ったなと改めて思いました。皆からの応援がなかったらこんなに走れなかったと思うし、襷を止めることがなくてよかったです。新潟地区も頑張ります。



陸上合同練習で小中連携 ～小学生と一緒に練習～

佐渡市小学校親善陸上大会に向けて、畑中生と畑小5・6年生と一緒に練習したり、中学生が教えたりしながら意欲や陸上技術を高める活動を、12日と14日の放課後、畑野小グラウンドで行いました。短距離・中距離・ハードル・走幅跳・走高跳・ボール投げの6グループに分かれ、畑中陸上部の精鋭たち(!?)が小学生に優しくアドバイスをしたり、見本を見せたりしました。この活動は昨年度からの取組で、昨年度教わった小6も中1もいて、昨年度より動きがよくなったように思います。中学生にも小学生にもWin-Win(どちらにもプラス)の関係になってきており、確実に小中連携が機能していると実感します。小学生も中学生も集中して取り組んでいました。少しでも成果に結びつければ嬉しいです。



LOOK BACK at the 畑野中 〈Part 2〉

畑野中の「創立70周年記念」の第2弾、その後の約25年を振り返ってみます。

1 創立25年(昭和47(1972)年)～50年(平成9(1997)年)頃

創立当初は戦後間もない頃で、大変な時代であったことは前回お伝えしました。その後、創立25周年(昭和47年(1972年))から25年位は、日本はどんな状況で、どんな畑野中だったでしょう？

日本は戦後10年後の後の約20年は高度成長が続き、産業が栄え、世界に類を見ない発展をします。戦後高度経済成長した日本は物質的に豊かな社会を築きましたが、若者は都会に出て行き、田舎では過疎化、高齢化、少子化、学校の生徒数は激減していきます。また、豊かな成熟社会、高学歴社会の中でいじめや不登校といった社会問題が出てきます。オイルショックや円高不況、その後、80年代後半のバブル景気になります。

「創立50周年記念誌」に小田町長は「開校当時から一貫して変わらない教育尊重、教育優先の気風が地域にあり、校舎の建設はもとより施設設備の充実、学校事業の運営など広範囲に物心両面にわたり力強い支援がありました。」と記しています。やはりこの畑野地域の人々は、「明日を担う青少年の教育の重要性」をしっかり意識し、学校を大切にしてきたことが分かります。

2 卒業生の思い出の作文から

それではまた、「50周年記念誌」から卒業生の思い出をいくつか紹介します。

① 「私が入部したバレー部はまだ屋外のスポーツで、野球部のボールが入って来るコートで練習していました。夏休み先輩から芝草の上で教えてもらった回転レシーブ、いろいろな話と共に…。そういえば、私たちが9人制最後の学年だったとか。この頃、先生や先輩の姿を自分の目標に置き換えるような、少し生意気で少し頑張る中学校生活でした。(第26回卒業生)

② 「私たちの頃は、先輩、後輩と言っても上下関係という感じではなく、大らかなものであって厳しくされたとかいう覚えもありません。」(第30回卒業生)

③ 「自分が自分の意志を主張し始める中学時代。自己との出会い。まだよく知らない自己と仲良くやっていくには若い頃だった。友との衝突もあれば、親への反発もあった。今思えば、現実を直視せずに、いつも夢や理想を追いかけていたような気がする。そして夢は必ず実現できると信じていた。そう信じさせてくれる先生方がいた。」(第36回卒業生)実はこれを書いたのは、本間教頭先生です。本間教頭先生には、この後、次の2つの質問をして、答えてもらいました。どう答えたかはお子さんにお聞きください。

Q1. あの頃と今の畑中生はどんなところが違うと思いますか？

Q2. 今の畑中生に望むことは何ですか？

本間教頭先生が畑中卒業後15年経ってから書かれたもので、その後には次のように書かれていました。「夢や理想に向かって努力している生徒と接するのは実に楽しい。『俺も負けんぞ』という気分させてくれる。そして彼らに何らかの手助けをしたいと思う。あの頃の先生方のように。」と締めくくっています。正に母校畑野中に戻って、そのことを実践している教頭先生です。

④ さて、本校にはもうに2人、畑中の大先輩がいます。一人は池先生。もう一人は庁務員の加藤さんです。池先生にも当時のことを聞きました。どう話されたかは、お子さんにお聞きください。

Q3. 中学校生活で一番、印象に残っていることは何ですか？

池先生もかわいい後輩のために、日々親身にとことん指導してくださっています。

⑤ 「第46回卒業生の僕たちは、思い出多き木造校舎と真新しい白亜の校舎の両方で学ぶことができ幸せでした。父や兄も学んだ懐かしい木造校舎は、廊下を歩けばミシミシ音がしたり、冬には窓の隙間から冷たい風や雪が入るような校舎でした。しかし木造独特の温かみやそこに感じられる歴史の重さが伝わってくる素晴らしい校舎でした。」(第46回卒業生)

(10月2日 全校朝会 校長講話より)